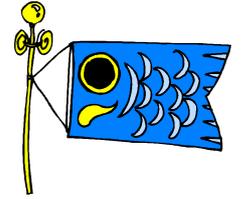


500号を記念してーその1



きかん紙0号は、1973年12月15日に発行されました。以来、38年目にあたる本日、500号を発行するに至りました。その間、頻繁に発行された年、年に数回するときなど、その様子は、合唱団の活動状況と重なります。

今回、500号を記念して、みなさんから原稿を書いていただいています。ご協力ありがとうございます。長くなりますので、今号から何回かに分けて掲載します。まだの方もよろしくお願いたします。

.....

声

平成23年5月1日

T・T

早いもので、合唱団に復帰して、早くも1年が過ぎてしまった。

この1年で変わったもの、それは「声」である。声の質というか、声に厚みが出てきたことを実感する。歌いながら、これが自分の声なのかと、自分の耳を疑うこともある。勿論、学生時代と比べると、音量は落ちるし、音域は格段に狭まっている。年齢を重ねて、声帯も硬くなってきているのだろう。

合唱団に復帰する以前は、声が出にくくなって、加竹さえも行かなくなって久しかったのに、この一年の変化には我ながら驚きである。

先日、NHKのラジオ番組での会話の中に、「声は、その人が歩んできた人生の重みを表現する」という話が出てきた。私も人並みに苦勞をしてきたと思うし、死の一步手前まで追い詰められた経験も持っている。この会話に出てくる話が、ある意味で本当だとすると、現在の私の「声の変化」も、その苦勞に対する神様のご褒美だと考えると、ちょっと嬉しくなる。

しかしながら、苦勞は依然として継続中であり、一向に光が見えてくる気配もない。それ故に、このまま苦勞が続けば、声ももっとすばらしくなり、ホケストラをバックに歌う日が来るのではないかと考えると、それも楽しい話である。

あと何年、合唱を続けられるかわからないが、声の変化を感じながら歌っていければと考えている。

.....

合唱と私

J・I

「合唱部の手伝いをしてほしい。」

音楽の先生に突然呼び出されて、何もわからず合唱の練習に駆り出されたのは、確か中学二年生か三年生のころだったと思います。各区の中学生が集まった音楽会があり、蒔田中学校の合唱部が出演するのですが、合唱部には混声合唱を歌うための男声がいなかったのです。そこで、音楽の先生が、各クラスから2、3名の生徒に目星をつけて声掛けをしてきたのです。何もわからず、先生に言われたのだからと、ちょっと嬉しくもあり、二つ返事で参加することにしました。

ほとんど面識のないメンバーとの練習が始まりました。なぜかという、その頃の1学年は、クラス50名で17学級あったのです。初めての発声練習、パートの練習、指導者の先生も親しく話したことのないことで、どぎまぎしながら、川ひとつ隔てた隣の校舎の音楽室に、欠席もせずに通っていました。「喜びの歌声よ。歌の調べよ。」と、声を張り上げ元気に任せて歌っていました。

たぶん「静かな鐘の音」という題名の曲も練習していました。とても、シンプルな曲で、ハーモニーも単純で難しい曲ではありませんでしたが、結構緊張しながら、女声の声に合わせてようと頑張っていました。慣れない合唱ということで、先生の指示に戸惑いながら、言われていることもあまりよくわからず声を張り上げていたように思います。

そんな練習を積み重ねていたある日、「静かな鐘の音、町の空に・・・」と歌いながら木造校舎の音楽室の窓から外を見たのです。その時の光景は、今でもしっかりと思い出されますが、四角いガラス窓から、大きな銀杏の木の向こうに、沈みかけていく夕日の赤が、びっしりと目に入ってきたのです。「ああ、この歌は、こんな空に響き渡る鐘の音なのか。」ふと、そんなことが心に浮かびました。

48年続いている合唱が好きになったのは、その時です。

日展を鑑賞して

Y・O

去年の11月に友人に誘われ女性3人で日展を鑑賞しに六本木の国立新美術館に行きました。もう、ちょうど50年前に、母方の伯父が、多分我が家の新築祝いのつもりで下さった自作の油絵について「この絵は、日展に出たんだよ。」と得意げに話していたので大層な展覧会だと思い、いつか見に行きたいものとかねがね思っていました。絵を見た後は、その年で最後という赤坂プリンスホテルのクリスマスツリーの電飾を見てからホテルで食事をして帰ることになり、夕暮れ迫る大雨の中、大喜びで出かけました。

日本画は、淡い色使いの絵が多く人物画もありますが、自然や動植物を扱ったものが多いように思いました。鹿の絵が印象的でした。全般に着物の柄によさそうな色使いでした。一つ一つの絵の前で立ち止まり「すばらしい」と思わず感嘆の声をあげる連続でした。大きさも横1メートル縦2メートルもあるでしょうか。50年前、伯父に頂いたような小さな絵は、一つもありませんでした。我が家にとっては、大きな絵だったのですけれど、どれだけ沢山の精神を込めて描いていることかと思われる力作揃いでした。

洋画は、日本画に比べて色がはっきりしていて人物画が多いと思いました。画面から飛び出して転がりそうな果物の絵に思わず触ってみたいくなり、そばまで行って目を凝らしました。やはり、力のこもった作品揃いでした。

その後、紙を使った作品や陶芸作品などを見てから彫塑を見に行きました。彫塑は、街中や学校の校庭、自然の中、彫刻の森などで見ると、大変に訴える力があり、私は大好きなのです。でも、ここの作品は、黒っぽい人型のものが、狭い台の上にずらりと並んでいて異様な雰囲気でした。一つ一つじっくり見ることも無く、造った方には申し訳なかったと思いますが、足早に通り過ぎ国立新美術館を後にしました。

雨に濡れながら赤坂プリンスホテルのクリスマスツリーの電飾も見ました。ホテルの窓がちょうどクリスマスツリーの形になるように、それぞれの色で明かりが付いているものできれいでした。

食事は、予定変更でホテルの前からUターン、川崎に帰ってから居酒屋で済ませました。雨の中歩きたくない気持ちが大きかったと思います。財布の中身は助かりました。多くの作品に触れ大きな感動がありました。意外にお客さんが少なく静かな中での居酒屋での語らいには、ゆったりと流れる時間に幸せを感じました。節電が必須の今の世の中、電飾も簡単には見られなくなるかもしれません。貴重な体験でした。また、「こんな時間を持ちたいね。」と最近知り合いになったばかりの私と同年輩の主婦3人で話し合いました。

きかん紙500号記念発行おめでとうございます。

Y・O

私は、入団してまだ2年足らずですが、暖かい雰囲気の中、お安く楽しく、健康的に歌わせて頂いています。

目標は、毎日の様に歌っていた時の自分なりの歌唱力を取り戻すことです。声のひびき、音程、リズム、ハーモニーはむろんのこと、ここで新しく教わったことは、「言葉に感情を込めて歌いなさい。」という点です。耳を澄ませば、確かに感情のこもった歌声が聞こえてきます。

基本が出来るようになったら、私も感情を込めた歌い方に気を配って歌えばもっと楽しくなるでしょう。

希望として申し上げます、私はどちらかと言うと、明るく軽やかな歌が好きです。今後ともよろしくお願ひいたします。



2011年	5月の練習計画				横浜室内合唱団
月日 時刻	7日(土)	14日(土)	21日(土)	28日(土)	
16:30~ 16:40	体ほぐし・発声練習				
	腹の支えや息の流れを感じながらのびのびと声を出しましょう。				
	のどの奥をしっかりひろげ、力を抜いて声を出しましょう。				
母音子音の響きをそろえて声を出しましょう。					
16:40~ 17:00	「Ave Maria」	「Ave Maria」	「Ave Maria」	「Ave Maria」	
17:00~ 17:25	「鷗」を暗譜しながら練習する。	「鷗」を暗譜しながら練習する。	「鷗」を暗譜しながら練習する。	「鷗」を暗譜しながら練習する。	
17:25~ 17:30	休憩	休憩	休憩	休憩	
17:30~ 17:55	千曲川の水上市を恋ふる歌 「若き日」を暗譜しながら歌う	千曲川の水上市を恋ふる歌より 「若き日」「落石にうたれしもの」を暗譜しながら歌う	千曲川の水上市を恋ふる歌より 「水上市」「牧歌を偲ぶ」を暗譜しながら歌う	千曲川の水上市を恋ふる歌より 「水上市は母のふところ」を暗譜しながら歌う	
17:55~ 18:15	「心の四季」より 「風が」を練習する。				
18:15~ 18:30	愛唱歌を暗譜しながら歌いましょう	愛唱歌を暗譜しながら歌いましょう	愛唱歌を暗譜しながら歌いましょう	愛唱歌を暗譜しながら歌いましょう	
練習の ポイント	○ 「千曲川の水上市を恋ふる歌」「鷗」を暗譜しましょう。				
	○ 曲の特徴をつかんで歌いましょう。				
	○ 「Ave Maria」を素直な声で歌いましょう。				
	◎ 「千曲川の水上市を恋ふる歌」を豊かに歌いましょう。				

「心の四季」を担当するに当たって

この度、「心の四季」の担当を自ら希望しましたが、練習係にご検討をいただき、皆さんからの承認を得られたことを、ありがたく思っています。

合唱団の40年記念演奏会の際に、40年続けてきたことについて、反省を含めた振り返りをしました。その中の1つに、「歌詞をじっくり読んだことがあったろうか」があります。

私の所属した大学の合唱団の、卒業生のある年代のグループが「水のいのち」を演奏する際に参加させていただいたとき、改めてその歌詞を読んでみました。その詩の中に、その時まで気がつかなかったことを発見しました。2曲目の「水たまり」という曲の詩の中に「…泥のちぎり、泥のうなずき、泥のまどい、

…」とあります。その「まどい」の意味を取り違えていたことが分かりました。そこに付けられた和音が、不安をもよおすようなものだったので、てっきり「惑い」と思っていたのですが、実は「団居」でした。これは「高野喜久雄」詩集の中の原詩を読んで分かりました。合唱曲の巻末にある詩はひらがなで書いてありましたので、自分で勝手に信じていたのですが、詩集の原詩では、その部分が「…泥の契り、泥の団

薬 (だんらん)、泥の頷き、…」となっていました。

また、12回の演奏会で組曲「雨」を歌いましたが、5曲目に「雨の日に見る」がありました。「朱薬 (ザボン)」というと、わたしは「皮が厚くて中身が小さい」などということしか、まず頭に浮かんできませんが、大木惇夫は違いました。「嵐のような雨と風の日、ザボンの鈍い黄色が灰かに浮かんで見え」、「現実が夢のようだ」と書いています。これは本当に見た風景ではなくて、絵を見たか想像して書いたのかとも、わたしには思えます。その上、「わたしは祈りをわすれている」という表現から、これは「長崎」だ、という具体的な場所を想起させられます。多田武彦がこの抒情性を増幅して、この曲はきれいな合唱曲になっています。

前述の「水たまり」をふくむ組曲「水のいのち」と、後述の組曲「雨」とでは、全体として大きな違いが見られると思います。高野の方には、詩の中に「だが」や「しかし」といった逆接の接続詞が見られ、現象に留まらず詩人の主体的な意思が入っていますが、大木の方は、客観的な情景に留まっています。合唱曲としてはその方が歌詞に向いていて、大木の詩はわかりやすく、素直に感じられます。

高田三郎が、どうして高野喜久雄や吉野弘のような詩に作曲をしたのかという動機については、わたしにはよく分かりません。しかし彼は、1955年に、詩人、作曲家、声楽家で作った「蜂の会」の発足のメンバーで、1964年に「水のいのち」、1967年に「心の四季」を出しています。

したがって、この曲は作曲家と詩人が協議をして作られていて、その上、作品にするために詩の改造が行なわれているようです。「心の四季」の中の歌詞についても、原詩が曲の歌詞と違うものがあります。原詩と曲の歌詞を比べると、詩の内容が同じようになるように、作曲家からの依頼を受けて直したのではないかと、と思われる所を感じます。

「心の四季」の詩には、むずかしい語が出てきませんが、その使い方の中に、詩人の考えが表されているのではないかと、考えさせられる面があります。自分なりに考えたことを提示して、それについてご意見をうかがったりしながら曲を作って行きたいと思っています。内容がこうだからこう歌うといった単純な因果関係にはすぐにはならず、いままでと曲の感じは変わらないかも知れません。しかし、内容を考えてという行為をして、詩について関心を高めたら、何らかの結果が現れるような期待を持っています。急がずに、余裕を持って歌ったら、楽しめるかも知れません。指揮の技術はありませんから、無謀な試みかも知れません。石原さんや今井さんのご指導を受けながら、努力したいと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。(眞形 泰雄)